

麦づくりも始まる擦文時代

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



十勝太若月遺跡(浦幌町)で見つかった、大きな土器にいっぱい的大麦。
(写真:浦幌町立博物館蔵: 2)

十勝に住む擦文文化の人たちは、川や海での漁、野草(山菜)や木の実集め、そして動物の狩りによって食べ物を得ていました。

擦文時代の後期、11世紀以降になると、十勝をはじめとする北海道東北部でも穀物の栽培が始まりました。

浦幌十勝川(かつての十勝川下流)を見下ろす十勝太(浦幌町)の丘の上では、大麦やキビ、それにシソが作られていました。収穫した大麦は、擦文土器の中にたくわえられました。(十勝太若月遺跡: 右ページ)

この大麦は寸づまりの形をしていて、もともとは北の大陸から伝わってきたもののようです。

自然の中から食べ物を得ながら、かたわらで農耕もおこなっていたのです。



十勝太古川遺跡(浦幌町)で見つかった鉄器と「ふいご(鉄を熱する時、火に空気を送って高温にする道具)」「羽口(その空気の通り道)」。
(写真:浦幌町教育委員会蔵)

鉄の道具が使われる

擦文時代になると、鉄の道具が多く使われ、ほとんど石器が使われなくなりました(木や骨・角の道具は使われます)。ついに「石器時代」が終わり「鉄器時代」に入ったのです。

小さな刀、ヤジリ(矢の先)、おの、カマ、針などに鉄のものが利用されます。鉄製品は、本州から持ちこまれました。

十勝太の丘にあった集落のうち、1軒は「かじ屋」でした。よそから持ちこまれた鉄の道具のうち、こわれたものや使いにくいものを、強い火力でとかして新しい道具に作りかえていたのです。(十勝太古川遺跡: 浦幌町)

ただ、なべはまだ鉄ではなく、土器が使われ続けます。

アイヌ文化へ

土器からは縄文がすっかり消え、もよう(文様)はヘラで描かれます。その文様を少しずつ変えながら、擦文時代はおおよそ500年くらい続きます。

本州からは鉄製品のほかに、土師器や須恵器と呼ばれる土器もやって来ました。

そして、12~13世紀ころには土器が使われなくなり、アイヌ文化へと変わっていきます。擦文文化の人々の子孫が、アイヌ文化をつくっていったようです(p111)。

また、アイヌ文化の中で大切な、自然(カムイ[神] p134)への感謝と願いをこめた祈りの儀式である「クマの霊送り(イオマンテなど)」は、オホーツク文化(p103)からの影響も受けついでいるようです。



擦文時代前期(9~11世紀ころ)の文様(南6線遺跡:帯広市)。



擦文時代後期(11~13世紀ころ)の文様(十勝太若月遺跡:浦幌町)。

(どちらも帯広百年記念館:帯広市緑ヶ丘2 電話:0155-24-5352)

1 大麦(オオムギ):麦のひとつ。小麦(コムギ)とちがって、グルテンというものが少なく、ねばり気があまりでない。あらくひいて、かゆにしたり、細かく引いてパンにしたりして食べる。ビールやしょうゆなどの原料になる。

2 浦幌町立博物館(うらほろちょうりつはくぶつかん):浦幌町字桜町16-1(らほろ21内)電話 015-576-2009 月曜日休館
3 土師器(はじき):本州で、古墳時代から平安時代にかけて野焼きで作られた土器。

火災現場の検証... 十勝太若月遺跡

十勝太若月遺跡（浦幌町）には、擦文時代の焼けた家のあと（第16号住居跡）がありました。このころは、何らかの事情で家に住まなくなった時に家を焼くこともあったのですが、この家は火事にあった家でした。

遺跡での「現場検証」の結果、火元はかまどか床の炉で、おりからの南風にあおられ北側の壁に燃え上がり、その後、屋根が焼け落ちたものと推定されました。

人骨はなく、幸い、住人は亡くならなかったようですが、ものを運び出す余裕はなかったようです。

そのため、当時の暮らしがそのまま残されていました。床には多数の土器が置かれ、金属器などの生活道具

や、炭になった「むしろ」のような編み物、同じく炭になった縄、木器、大麦・シソ・キビのタネが見つかりました。

かまどの前に置かれた大型の土器（カメ）には、脱穀された大麦（炭化）がビッシリと入っていました（左ページ）。

住人にとっては不幸なできごとでしたが、この火事のおかげで、当時の生活のようすがくわしくわかりました。



十勝太若月遺跡の第16号住居跡。火災にあったため、当時の生活がそのまま残された。（写真：浦幌町立博物館蔵）



発掘中の十勝太若月遺跡。丘の上にある。（写真：浦幌町立博物館蔵）



十勝太若月遺跡の位置。浦幌町字下浦幌。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

もう少し細かいこと

最後の土器... 内耳土器

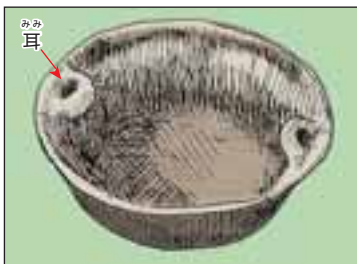
擦文文化は、北海道における最後の土器文化です。

一番最後の土器は「内耳土器」と呼ばれるもので、ひもをつけるための2つの「耳」が、器の口の内側につけられています。

天井から下げられたかぎにぶら下げて炉にかける時、ひもが焼けないようにする工夫のようです。実は、この形は「内耳鉄なべ」と呼ばれる鉄なべをまねてつくったものでした。

鉄なべが行きわたる前に、まず形が伝わったのです。

内耳土器はアイヌ文化の初期まで残り、千島方面ではかなりおそくまで残りました。



内耳土器。なべの内側にひもを取りつけるための「耳」がある。右の絵のように、火がひもに直接当たらないようにできる。



擦文時代の集落の場所

ホロカヤントー堅穴群（大樹町）では百数十軒の、また、十勝太若月遺跡（浦幌町）では55軒の擦文住居のあとが見つかっています。ホロカヤントー堅穴群は海岸近くに、十勝太若月遺跡は浦幌十勝川（かつての十勝川）の河口近くにありま

す。このように、擦文時代の集落のうち大きなものは、海岸近くや大きな川の河口近くにつくられています。

これは、十勝だけでなく、北海道の擦文文化全体にいえることで、擦文文化の大きな特ちょうの一つです。

本州文化との結びつき

擦文文化は、本州からの影響を大きく受けた文化です。

家の形は、本州の「古墳時代（4～8世紀ころ）」の家のつくりと同じです。

9～10世紀には、本州産の須恵器が北海道各地に伝わっています。さらに11世紀からは、鉄製品が本州から運びこまれるようになります。

サハリンから北回りに入ってきたものや文化もありましたが、本州からの影響の方がはるかに大きなものでした。

こうした本州との交流は、のちのアイヌ文化の成り立ちともかかわっていきます。（p110・p136）

4 須恵器（すえき）：斜面に穴をほり、おくにけむり穴を開けた「竈窓（あながま）」で焼いた土器。高温で焼けるのでうすくてじょうぶにでき、陶器（とうき）に近い。
5 12～13世紀ころ（12～13せいきころ）：平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて。

6 炭化（たんか）：炭になること。生き物の体などの有機物（炭素化合物）が、酸素の不十分な状態で加熱されること（など）によって、炭素だけになっていくこと。炭化するると分解されず（くさらず）長い間そのまま残る。